ドナルド・キーンの太平洋戦争《第１回》

ドナルド・キーンって知ってますか？

生涯をかけて文学とか、お芝居とか、日本人の心みたいなものの研究に没頭し、

その素晴らしさ、豊かさを世界に伝え続けた人、それを生きがいとした人。

とことん日本を愛し、日本人とともに生きたい一心で、

東日本大震災のニュースが世界中をかけめぐっていたときに、

アメリカ人であることをやめて、日本人になった人。

この人のこと、もっと知りたいと思いませんか？

DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI

人生でいちばん心が暗かったとき

飛び級を繰り返して、コロンビア大学に入学したころ。

1940 年のある日、ニューヨークの繁華街タイムズスクエアの古書店に、ひとりの若者の姿がありました。若者は店の片隅に積まれた安売り本の山に目をとめ、そこから何気なく1冊の本を手に取ります。表紙には *THE TALE OF GENJI* とありました。世界最古の大河小説ともいわれる日本文学の古典『源氏物語』の英訳本です。彼は2冊セットのその本を 49 セントで買い、家に持ち帰ります。18歳のドナルド・キーン青年の日本文学との出会いでした。

「人生で最も心が暗かった時期」。ずっとあとになって、ドナルド・キーン先生は当時をそんなふうにふりかえっています。前年にヨーロッパで始まった第二次世界大戦が、この年、ドイツ軍の猛進撃で一気に拡大していました。フランスの大半は占領され、イギリスでもドイツ軍機の爆撃が始まります。一方、アジアでは日本が中国との戦争を本格化させ、太平洋でもいやな動きを見せていました。

子どものころからクラスでいちばんのちび、スポーツもからっきしダメだったキーン青年は、なによりも戦争がこわかった。おばけよりもこわかった。だからドイツ軍が次々とヨーロッパを征服していくニュースがおそろしくて、新聞を開くこともできなくなっていたのです。彼が『源氏物語』を手にしたのはそんなときだったのでした。

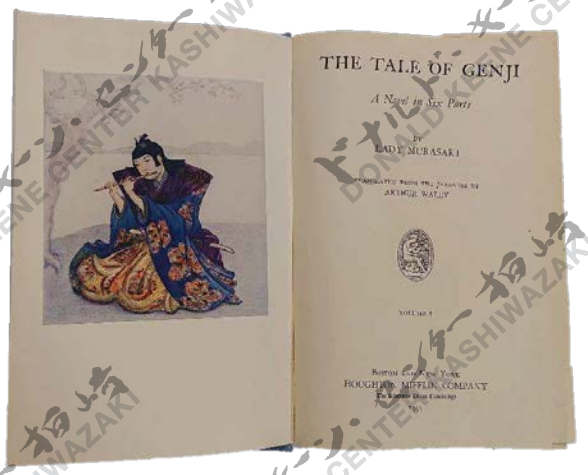
1925 年にイギリスで出版。

翻訳したアーサー・ウエーリは、詩人でもあった。

耽美な世界観はヨーロッパの人たちを魅了した。

『源氏物語』に心うばわれる

“お買い得”、ただそれだけの理由で買ってきた『源氏物語』でしたが、読み始めるや、たちまち夢のように美しいいにしえの物語に心をうばわれてしまいました。「英雄も勇ましい戦士も出てこない。みんな美のためだけに生きている」。キーン青年は夢中で読みふけります。ときには前のページに戻って文章のひとことひとことを何度も何度も味わいながら。



キーン青年は『源氏物語』が見せてくれた世界、自分が生きている現実とちがう、戦争や暴力のない世界にすっかりはまってしまったのでした。

いやな現実を忘れたくて……

実は当時のキーン青年、日本に良い印象をもっていませんでした。キーン青年には中国人の友だちがいましたから、日本といえば「中国に戦争をしかけた国」、「友だちの祖国を苦しめている国」でした。日本の美術、とくに有名な浮世絵に魅せられたことはあったけれど、日本は美の国どころか、軍国主義のおそろしい国だと思っていたのです。

ふたりで万博に
出かけたときの写真。
日本館へは
キーン青年ひとりで入った。

ところがもう『源氏物語』を手放すことができません。それは自分が生きている現実のいやなこと、おそろしいことから逃がれるための「どこでもドア」。キーン青年は、自分だけのもうひとつの世界を手に入れたのでした。

もちろん、このときのキーン青年、まだリアルな日本と出会っていたわけではありません。でもそのときが間もなくやってきます。彼がなによりこわがっていた戦争、アメリカと日本がはげしく戦う太平洋戦争が始まるのです。

〈第2回につづく〉

ドナルド・キーン・センター柏崎
DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI
開館時間:10 時～17 時（最終入館 16 時半）
休 館 日:月・火曜日、冬季(12/25～3/31)
問合せ先:新潟県柏崎市諏訪町 10-17(0257-28-5755)

ドナルド・キーンの太平洋戦争《第２回》

太平洋戦争が起きなかったら、私は日本文学者になろうと思わなかっただろう。

ドナルド・キーンって知ってますか？
生涯をかけて文学とか、お芝居とか、日本人の心みたいなものの研究に没頭し、
その素晴らしさ、豊かさを世界に伝え続けた人、それを生きがいとした人。
とことん日本を愛し、日本人とともに生きたい一心で、
東日本大震災のニュースが世界中をかけめぐっていたときに、
アメリカ人であることをやめて、日本人になろうと決めた人。
この人のこと、もっと知りたいと思いませんか？

【前回のお話 ▸▸▸▸▸ プレイバック】

1940 年のある日、ニューヨークの古書店で『源氏物語』の英訳版を買った 18 歳のドナルド・キーン青年。読み始めるなり、夢みたいに美しい物語の世界に心奪われます。

第二次世界大戦が始まっていました。ヨーロッパでは戦争が一気に拡大し、アジアでは大陸で中国と戦争していた日本が太平洋でも不穏な動きをみせていました。なによりも戦争がこわかったキーン青年にとって、人生でいちばん心がふさいでいた時期でした。でも、『源氏物語』を読んでいるときだけは、そんな現実を忘れることができたのです。

DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI

太平洋戦争が始まった日

みなさんは、外国人の友だちはいますか？いまはいない？これからできるかもしれませんね。ドナルド・キーン青年には中国人の友だちがいましたが、もうひとり、日系人の友だちもいました。猪俣忠（いのまた・ただし）君といいました。

1941 年 12 月7日の夕方のことです。その日は日曜日で、キーン青年は猪俣君とふたりでハイキングに行ってきた帰りでした。

街角の売店で売っている新聞の見出しに目がとまりました。「日本がハワイの真珠湾を攻撃！」。特大サイズの見出しです。日曜日に夕刊を出しているのはその一紙だけ。やたらとセンセーショナルな記事を売りにしていることで知られる新聞でしたから、またかよ、とふたりは笑い合って別れました。

妹と愛犬ビンゴと一緒に。

ビンゴはのちに、「黄犬（キーン）」という、キーン先生を象徴するデザインのモデルになっています。

はじめての外国人のともだち、李君と。

ところが、家に帰ってラジオのスイッチを入れるとこのニュースばかり。「やばい、マジだ！」

キーン青年、ついさっき別れた猪俣君のことが心配でなりません。ショックで動転しているに違いないのです。すぐさま彼のアパートに向かいましたが、姿がありません。必死で近所の心あたりをあたってみても、行方知れず。

あとになって、無事だったことがわかって安堵しますが、本人から聞いたあの夜のことはキーン青年の心をかき乱しました。猪俣君はあの晩、日本人とみられて何者かに襲われやしないかとおびえ、終夜営業の映画館に行って暗がりの中で一晩ちぢこまっていたのでした。

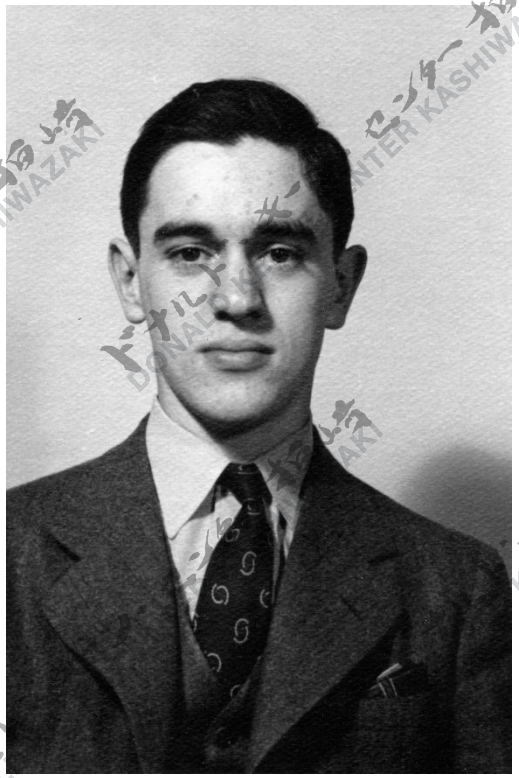
ドナルド・キーン・センター柏崎 DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI

悪夢が現実に……かくなるうえは……

翌日大学に行くと、日本との戦争の話題で持ち切りだったのはいうまでもありません。昼休みに入った中華料理店では、日本に宣戦布告する大統領の声がラジオから流れていました。それを聞きながら、キーン青年は思いました。「長年の悪夢が、現実になった」。

学生生活が終わろうとしていました。戦争が始まったのだから軍隊に入らなければならないだろうと覚悟しました。だけど、銃弾がびゅんびゅんとびかう戦場で、銃剣をかまえて突撃するなんてぜったいムリ。飛行機に乗ってどんどん爆弾を落とすなんてのもありえない。思い出してください。キーン青年、子どものころからこの世でいちばん戦争がこわかった。弱虫？いえいえ、「平和主義者」と呼んでほしい。ではどうする？

やがてすばらしい情報が舞い込みます。海軍に日本語学校があって、翻訳と通訳のできる軍人を養成してるらしい。これだ！ これしかない！



日本語を学びたい一心で

キーン青年は英語に訳された『源氏物語』に夢中だったけど、中国人の友だちへの気づかいから、当初は日本語を勉強しませんでした。ところが、たまたまその年の夏休みに、猪俣君を先生役にした仲間うちの日本語の合宿勉強会にさそわれて、参加していたのです。『源氏物語』を日本語で読めたら、という気持ちもあったことでしょう。

軍隊に入ることはもう避けられません。でも海軍の日本語学校に入学できたら、それこそ本格的に日本語を学ぶことができるのです。キーン青年は早速、海軍省という役所に入学志願の手紙を書いて送ります。

リアルな日本との出会いは、もう目前でした。

〈第3回につづく〉

ドナルド・キーン・センター柏崎 DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI

ドナルド・キーンの太平洋戦争《第3回》

ドナルド・キーンって知ってますか？
生涯をかけて文学とか、お芝居とか、日本人の心みたいなものの研究に没頭し、
その素晴らしさ、豊かさを世界に伝え続けた人、それを生きがいとした人。
とことん日本を愛し、日本人とともに生きたい一心で、
東日本大震災のニュースが世界中をかけめぐっていたときに、
アメリカ人であることをやめて、日本人になろうと決めた人。
この人のこと、もっと知りたいと思いませんか？

太平洋戦争が起きなかったら、
私は日本文学者になろうと思わなかっただろう。

【前回のお話 ▸▸▸▸▸ プレイバック】

ヨーロッパで起きた第二次世界大戦が拡大の一途をたどっていました。暗く過酷な時代でしたが、キーン青年は『源氏物語』にえがかれた夢のような世界に心を奪われていました。戦争がなによりもこわかったキーン青年、『源氏物語』を読むことでだけが心の救いになっていたのです。

そしてついに日本との戦争、太平洋戦争が始まります。軍隊に入らなければなりません。だけど戦場で戦うなんて自分にはとてもムリ。どうしよう？

そこに耳寄りな情報が。海軍日本語学校で日本語のできる軍人を養成している。これだ！　キーン青年は早速入学を志願しました。

DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI

海軍に入隊

海軍日本語学校の授業の様子。

キーン青年の海軍日本語学校入学が決まりました。それは海軍の軍人になるということ。出発の日、親戚のおばさんたちと一緒にニューヨークの駅に見送りに来たお母さんは泣いていました。息子の前途が心配だったのです。学校がある西海岸のサンフランシスコまでは鉄道で北米大陸横断の旅。5日間かかります。

それはドナルド・キーン青年の「日本」への長い長い道のりのはじまりでした。

お母さんの心配をよそに、キーン青年の心ははずんでいました。「戦争こわいキャラ」はどこへやら、日本語が勉強できるっていう期待に気分はもう舞い上がり気味。能天気といえばたしかにそうだけど、それがキーン青年なのでした。しかし、彼を待ち受けていたのは戦争の現実でした。このあと戦場に派遣されて、地獄さながらの衝撃的な光景をまのあたりにすることになるのですが、その話は次回に……。

さて、入学から 11 か月、猛特訓を経て、キーン青年は 30 名ほどの仲間とともに卒業式を迎えました。なんと 11 か月で彼らは、日本語で読み、書き、話すことができるようになっていたのです。成績がトップだったキーン青年は、卒業生を代表して日本語で 30 分のスピーチを行いました。海軍の語学士官ドナルド・キーン中尉の誕生でした。

海軍日本語学校、卒業式の様子。

↑ドナルド・キーン

ドナルド・キーン センター柏崎 DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI

戦死した日本兵の日記帳

日本兵捕虜を尋問。
戦争当時のアメリカの雑誌に掲載された写真。

キーン青年の最初の任地はハワイにある軍の施設でした。日本軍から押収した文書の翻訳が主な仕事です。

意味があるとは思えない退屈な文書ばかりで、うんざりしはじめたころのこと。資料室の片隅に置かれた木箱に目がとまります。箱には小さな手帳が詰まっていて、なんともいやなにおいが漂っていました。その手帳、戦死した日本兵の日記帳だったのです。

遺体から抜き取ったのか、表紙に血のりがこびりついていて、それがいやなにおいの原因でした。アメリカ軍は情報がもれることを警戒し、兵士が日記をつけることを禁じていましたが、日本軍は兵士に毎年日記帳を支給していたのです。

日記の内容を翻訳するつもりで、おそるおそる1冊手に取って読み始めたキーン青年、たちまちその文章に心を奪われ、任務を忘れて読みふけってしまいました。これこそ、『源氏物語』しか知らなかったキーン青年が、リアルな日本と出会った決定的な瞬間だったのです。

最初の日本人の親友は……

日記は、南方の戦場に取り残され、死が目前であることをさとった日本兵が、ジャングルのほら穴とか塹壕（ざんごう）の中で、心に映った最後の風景を書きつづったものでした。

日系 2 世の部下たちと。
↑
ドナルド・キーン

なぐり書きの日本語はめちゃくちゃ読みづらかったのに、キーン青年は夢中で文字を追い続けました。これを書いたのはどんな人だったのだろうと思ったことでしょう。

さてみなさん、なぜキーン青年はそんなに心を揺さぶられたのでしょうか？ なにに心を奪われたのでしょう？

何十年もあとになって、ドナルド・キーン先生は、この時のことをこんなふうに語っています。

「これらの日記を書いた兵士たちは、いわば私の、最初の日本人の親友だったのだ」。

このキーン先生のことばそのものが、「文学」かもしれません。

〈第4回につづく〉

ドナルド・キーン・センター柏崎 DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI

ドナルド・キーンの太平洋戦争《第４回》

太平洋戦争が起きなかったら、私は日本文学者になろうと思わなかっただろう。

ドナルド・キーンって知ってますか？
生涯をかけて文学とか、お芝居とか、日本人の心みたいなものの研究に没頭し、
その素晴らしさ、豊かさを世界に伝え続けた人、それを生きがいとした人。
とことん日本を愛し、日本人とともに生きたい一心で、
東日本大震災のニュースが世界中をかけめぐっていたときに、
アメリカ人であることをやめて、日本人になろうと決めた人。
この人のこと、もっと知りたいと思いませんか？

【前回までのお話 ▸▸▸▸▸ プレイバック】

太平洋戦争が始まりました。キーン青年は日本語を学びたい一心で語学士官になりました。最初の任地ハワイでの仕事は、日本軍から押収した文書の翻訳でした。ある日、戦死した日本兵の日記帳を見つけて読みはじめたキーン青年、たちまちその内容に心を奪われてしまいます。そこには、死に直面したひとりの人間の心に映った最後の風景がつづられていたのです。魂を揺さぶられるほどの感動をおぼえたキーン青年は、仕事であることを忘れて夢中で読みふけったのでした。

DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI

はじめて戦場へ

ハワイで日本語文書の翻訳に携(たずさ)わってしばらくしたころ、キーン青年は北太平洋のアッツ島という島への上陸作戦に派遣(はけん)されました。日本軍に占領されていた島を奪い返すための作戦でした。ついに戦場に行くことになったのです。

下の写真は、その作戦が終了した後に立ち寄ったエイダック島という島で撮影されたもの。左端にキーン青年がいます。珍しく銃を持ってますが、微妙に似合ってない感じ。でも、もう片方の手にご注目。何かしっかり抱えていますね。これ、何だと思いますか？ 『和英大辞典』なのです。「銃なんかより、こっちが大事なんだけど、文句ある？」とでも言いたげです。さすが「日本語オタク」。仲間たちとともに、一見なごやかな雰囲気の写真ですが、実はこの少し前、キーン青年はアッツ島で衝撃的な光景を目にしていました。

戦場で見た光景

アッツ島では激しい戦いが2週間あまり続きましたが、語学士官のキーン青年は戦闘に参加せずにすみました。銃声がやんで上陸したとき、キーン青年が目にしたのはどんな光景だったのか。それはあちこちにころがっている日本兵の死体、しかもアメリカ軍に撃(う)たれたのではなく、手りゅう弾（手投げ弾）をわざと自分の胸もとで爆発させた日本兵の死体だったのです。

アッツ島の日本軍は、弾薬が尽き、それ以上戦えなくなっても降伏しませんでした。で、どうしたかというと、最後に1個だけ残った手りゅう弾を敵に投げつけないで、自分が死ぬために使った。それはキーン青年の理解をこえるものでした。なんでそんなことを？ この日本兵の行動をひとことで言い表したことばがあります。「玉砕(ぎょくさい)」。

なぜ捕虜にならずに死を選ぶのか？

「玉砕」って、聞いたことありますか？　当時の日本では、戦場の日本兵が敵の捕虜にならずにいさぎよく死ぬことを、「玉砕」と言った。宝石みたいな美しい玉が砕け散ることにたとえて、そう言ったのです。アッツ島はのちに、日本軍の最初の玉砕の地として歴史に残ることとなりました。キーン青年が見たのは、まさに日本軍が玉砕した直後の光景だったのです。

捕虜になれば命は助かるのに……と思いませんか？　実際、負傷するなどして捕虜になった日本兵もいました。ところが彼らの多くが、死なずにすんだことを喜ぶどころか、捕虜になった自分を責めていたのです。なぜなら、玉砕することができなかったから。「生き残て捕虜になるのは恥ずかしいことである」。当時の日本兵はそんなふうに頭にたたきこまれていたのです。

同じ人間として

「捕虜はぜったい恥ずかしいことじゃない。国は違ってたって、同じ人間なんだから、わかってくれるはず」。ハワイの日本人捕虜収容所で、キーン青年と語学士官の親友オーテス・ケーリは、捕虜たちの考え方を変えさせようと懸命に説得を試みます。

日本人捕虜の尋問や通訳が任務でしたが、キーン青年は個人的なこととか、文学、音楽の話もしました。クラシック音楽が聴けないのがつらいという捕虜がいたので、収容所のシャワールームに小型の蓄音機を持ち込んで、ベートーベンのレコードコンサートを開いたこともありました。同じ人間として捕虜たちと向き合ったのです。そうこうするうちに、ホンネを語る捕虜も出てきました。そう、捕虜たちとの心の通い合いが生まれていたのです。そしてなんと、お互い敵同士の両者が協力して、戦争を終わらせるための、前代未聞のプロジェクトが始まることになるのです。

そのプロジェクトは、太平洋戦争を終わらせるきっかけのひとつになったともいわれていて、……おっと、やばい。残念だけど、このお話はここまで。ネタバレとかではなく、話せば長くなってしまうからです。尻切れトンボですが、ホント、申しわけない。

＊　　＊　　＊

さて、みなさん、去年の春から4回にわたってお届けした〈ドナルド・キーンの太平洋戦争〉は今回でひとまず終了。続きが知りたくなった？　だったら、ぜひ諏訪町にあるドナルド・キーン・センター柏崎を訪ねてみてください。いまはまだ冬季の休館期間ですが、4月3日から開館しています。卒業生も大歓迎。

お目にかかれるのを、楽しみにしています。

〈ドナルド・キーンの太平洋戦争：終わり〉

ドナルド・キーン・センター柏崎
DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI
開館時間：10 時～17 時（最終入館 16 時半）
休 館 日：月・火曜日、冬季（12/25～3/31）
問合せ先：新潟県柏崎市諏訪町 10-17（0257-28-5755）